

## 翻 訳

## ダヤック人 (上)

Tr. by FUKAMI Sumio,  
 “DAJAKS”, *Encyclopaedie van Nederlandsch-Indië*. (I)

深 見 純 生 訳

キーワード：ダヤック人，ボルネオ，カリマンタン，マレー人，プナン族

## 訳者序言

本稿は『オランダ領東インド百科事典』第2版第1巻の項目「ダヤック人」の翻訳である。“DAJAKS”, *Encyclopaedie van Nederlandsch-Indië*, tweede druk, eerste deel, 's-Gravenhage/Leiden, 1917:556-568.

いまから1世紀ほど前の記述であるから、もとより現状を直接知るための手がかりにはならない。しかしそう遠くない過去においてボルネオ（カリマンタン）の内陸部居住民がどのような状態にあったか、あるいはどのように記述されていたかを知るにはよい資料である。同じ百科事典の初版第1巻（1896年）413-423頁に別の執筆者による同じ項目があるが、第2版では全面的に改稿され分量も大幅に増えている。

いささか長いので2回に分割掲載する一方、本稿で言及される同じ百科事典の2つの項目「ダヤック語DAJAK'SCH」〔*ENI* I : 568-569〕と「プナン族 POENANS」〔*ENI* III (1919) : 434-435〕、そして同じ百科事典の補遺第1巻（通巻第5巻）の項目「ダヤック人DAJAKS」〔*ENI* V (1927) : 132-134〕の翻訳も掲載する。

翻訳ではつねに適訳が見つかるとは限らないが、本稿ではとくにオランダ語の *stam*（英語だと *tribe*）の適訳がわからない。辞書には部族や種族の語があるので、ここでは部族としておいた。これとの関連で各部族の名前は〇〇

族（たとえばクニャ族）とした。なお本稿における部族stamの語の多義性については第2節および第6節冒頭で取り上げられている。

当時の行政区画の最上位はボルネオ西州Westerafdeling van Borneoとボルネオ南東州Zuider- en Oosterafdeling van Borneoであり、前者は現在の西カリマンタン州に、後者は現在の中・南・東カリマンタン3州に相当する。1919年版の『オランダ領東インド政庁要覧』によれば西州は4県afdeling, 17分県onderafdelingに区分され、南東州は6県, 24分県に区分される〔*Regeerings-almanak voor Nederlandsch-Indië, 1919-2*:215-220〕。分県の下の行政単位は郡districtである。

固有名詞あるいは術語などの初出に原綴りを入れたが、オランダ語もインドネシア語（マレー語）もそれぞれ現在の綴り字法に変更した。原注1に記されるとおり、本稿の母音eは、ボルネオBorneoなどの著名な語の場合を除いて、すべて無声音のe（いわゆる曖昧母音）である。しかし、少数ながらeの上に記号が付されて、異なる母音であることが示される場合があり、訳文中でもこの記号をつけてある。

〔 〕は訳者による簡単な訳注である。

なお、本稿はもともと1993～1994年に科研（学術調査、番号04041060）「島嶼部東南アジアのフロンティア世界に関する動態的研究」（代表者加藤剛京都大学東南アジア研究センター教授（当時））のカリマンタン調査に同行する機会を得た際に翻訳したものであった。今回本誌に掲載するにあたり、誤りを訂正しただけでなく全面的に改訂した。

## ダヤック人

### 目 次

#### ダヤック人

1. 名称の起源
2. 部族区分
3. 外見と性格
4. 衣服, 装身具, 刺青, 身体棄損, 武器
5. 住居, 家財
6. 部族の構成・行政・裁判
7. 土地権, 農業, その他の生業（以上本号）
8. 結婚と相続（以下次号）
9. 宗教, アニミズム等々
10. 日常生活の祝祭・葬式・埋葬
11. 言語と文学
12. 文献

#### ダヤック語

#### プナン族

#### ダヤック人（補遺）

### ダヤック人

#### 1. 名称の起源

ボルネオ島の非ムスリム原住民がダヤックDayakという総称で一括される。

このダヤックという語, というよりマレー語のオラン・ダヤックOrang Dayakという名前は, もともと上流の人ないし内陸の人という意味であり, 中部スラウェシ内陸部の異教徒の住民を指すブギス語のトラジャTorajaと同じ意味といってよい。トラジャという呼称がそうであったように, 沿岸地域のマ

レー人もオラン・ダヤックという名前に田舎者、異教徒の意味を込めていたにちがいない。このことからまた、ダヤック人が自らをダヤックとよばないことも明かである。彼らは部族名に自分たちが現に住んでいる、あるいはかつて住んでいた川の名前をつけている。沿岸の住民がマレー人とよばれ内陸の住民がダヤック人とよばれるという区別がよく行われるが、これはどこでも当てはまるわけではない。たとえばサラワクSarawakではダヤック人も海沿いに住み、他方でボルネオの大河川が内陸深くまで航行可能なことから、マレー人が内陸深くまで居住することがある。くわえて、沿岸の多くのところで、移住民としてはマレー人だけでなく、ブギス人や中国人等々も住んでいる。さらに、ダヤック人やマレー人という名称がもはや純粋に民族誌的な ethnographische 区別を意味しなくなっていることにも留意すべきである。というのも、マレー人はダヤック人との通婚がたいへん多く、この結婚から生まれた子孫たちは、少なくとも名目的にはムスリムになっていて、したがってでもはやダヤック人とは自称せず、マレー人と自称する。かくして、純血のダヤック人でさえ、イスラムに改宗し、しだいにマレー人とみなされるのを願うようになるであろう。これはとりわけ、ダヤックという名前のもつ、多少とも異教徒や首狩り族と同一視される、軽蔑的なニュアンスを避けたいためである。

## 2. 部族区分

ダヤック人は多数の部族stamに分かれる。それらの名称は、すでに述べたようにたいいていの場合、彼らが居住する河川に由来する。すべての部族名を列挙するのはそもそも無意味であろう。ましてやダヤック人を然るべくいくつかの大きな部族複合に区分できるのである。今までのところ十分な人類学的 anthropologisch 調査がまだなされていないため、その区分は主に民族学的 ethnologisch 区分に基づいている。しかしながら、コールブルッゲ博士 Dr. J. H. F. Kohlbrugge は、ニーウェンハイス博士 Dr. A. W. Nieuwenhuis が 135 人のダヤック人に行った人類学的測定に基づいて、中央ボルネオに住む民族集

団は少なくとも2つに区分されるという推測に至った。すなわち長頭dolichocephaalと短頭brachycephaalであり、前者にはマンダイMandai川（カプアスKapuas川左岸の支流）に住むウル・アユル・ダヤックUlu-Ayer Dayak族が含まれ、後者にはムンダラムMendalam川（カプアス川右岸の支流）に住むカヤンKayan族が属する。ニーウェンハイス博士によれば、両グループは民族学的にもはっきりと区分される。このカヤン族は、中央ボルネオの住民の大きな部分をなす、バハウ・クニヤ・カヤン・ダヤックBahau-Kenya-Kayan-Dayak族という一つの大きな親縁部族の複合に属する。バハウ族はマハカム川の上流と中流の諸部族である。カヤン族はムンダラム川と上ルジャン Rejang川（サラワク）の諸部族である<sup>1)</sup>。クニヤ族はクタイKutaiの内陸部でカヤンKayan川ないしブルンガンBulungan川沿いおよびタワンTawang川沿いとブラウBerau川沿いの諸部族であり、さらにサラワクで上バラムBaram川の諸部族である。そしてキンジンKinjin族はブルンガンの内陸地方にいる。これら諸部族はすべて、アプ・カヤンApu Kayanないしポ・クジンPo-Kejinとよばれるカヤン川の源流域を故地とする。そこから諸部族が次々と諸河川の中流域、下流域に移動した。その移動の際に、そこに住む諸部族と大いにまざりあった。かくして、アプ・カヤンのクニヤ諸部族がこの部族複合のもっとも純粋な代表者と見なされる。この大規模な民族移動は18世紀の後半の始まる頃にはすでに始まっており、アボ・カヤンからの最後の大きな移動は1876年頃に起こった。

バハウ族やカヤン族に属する個々の部族の名前はたいいていMaで始まる。ウマUma=家の省略形であるが、今住んでいるあるいはかつて住んでいた川の名で自らをよぶのが彼らの習慣だからである。つまりマ・スリンMa-Sulingは文字どおりはスリン川沿いの家という意味である。

ボルネオ南東州の主な部族あげる。ビアジュBiaju族はバリトBarito川の河口とコタ・ワリンギンKota-Waringin山地の間に住むだけでなく、ブントウツクBuntut分県の上流部（ドゥスン地域Dusunlanden）にも住む。オト・ダノムOt-Danom族は、カティンガンKatinganにおいて、上カハヤンKahayan川、

カプアス川、ドゥスン川沿いに住む。オロン・マアニャンOlon-Maanyan族もブントックに住み、小さい部族だが様々な面で注目される。かつて南東州のほとんどの部族につけられた総称オロ・ガジュOlo-Ngajuつまり「上流の人々」は、河川の下流に住む部族にはあまりあてはまらない。

ボルネオ西州のダヤック諸部族の総称というものはない。エントホーフェンEnthoven (Bijdrage tot de Geographie van Borneo's Westkustボルネオ西海岸の地理に関する研究) があげている多数の部族のうち、次が主な部族である。上カプアス地域では、ウンバル・ダヤックEmbaluh-Dayak族、ムンダラム川のカヤン族(既述)、ウル・アユル・ダヤックUlu-Ayer-Dayak族はマンダイ地域と上ムラウィMelawiに住み、南東州のオト・ダノム族と親縁関係にある。自治領サンガウSanggauと同スカダウSekadauのスカダウ・ダヤックSekadau-Dayak族とリブン Ribun族。他方、自治領タヤンTayanには、ヒンドゥー・ジャワ入植者の子孫と自称するデサ・ダヤックDèsa-Dayak族がいる。ランダックLandakのマニユケ・ダヤックManyuké-Dayak族。そして最後にバタン・ルパルBatang-Lupar族はサラワクからきた海ダヤックZee-Dayak族であり、バタン・ルパル川の出身である。

サラワクとイギリス領北ボルネオには、すでに述べたカヤン族とクニャ族の他に、さらに4つの主なグループがいる。海ダヤック族ないしイバンIban族、ムルットMurut族、陸ダヤックLand-Dayak族、そしてプナンPunan族である。

最後にあげたプナン族は中央ボルネオにもいる。彼らは今なお移動生活を送っている内陸の民のことである。漂泊民に属するものにさらにブクタンBeketan族とブカットBukat族があり、南東州の内陸部にはオロ・オトOlo-Ot族があり、ブルンガンBulunganにはバサップBasap族がいる。項目「プナンPOENAN」参照。

### 3. 外見と性格

ダヤック人の多数の主部族や支部族の間に肉体的特徴にも精神的特徴にも

## ダヤック人（上）

多数の相違点があるのは予想されたとおりである。こうした差異を無視するのなら、ダヤック人は、ヨーロッパの諸民族の平均より小さいとはいうものの、一般的には体格が良いといえる。ニーウェンハイス博士の計測と1899年のサラワクにおける「ケンブリッジ探検隊」の計測によれば、諸グループの平均身長 of 最高値は海ダヤック族の158.5センチである。頭の形は海ダヤック族、クニャ族、カヤン族、プナン族では圧倒的に短頭である。その他の諸部族では、とくにウル・アユル・ダヤック族では長頭である。ただし、幅広の頭骨の者も見られる。

頭髮は一般に黒く、真っ直ぐか、波打っていて、巻毛は例外である。皮膚の色は濃い黄色から褐色であり、海ダヤック族がもっとも黒い。バハウ族とクニャ族についてニーウェンハイス博士は、彼らの肌は若い時はたいいてい褐色というより淡い黄色といえるので、一般的に、年をとって色が黒くなるのは陽光の作用によるものと述べている。ダヤック人でもっとも目立つこの部族の人々の顔は楕円形で、目はぱっちりとして暗褐色であり、いわゆる蒙古斑はない。鼻は一般に低くて、鼻翼はとくに大きくはない。口はとくに大きくはなく、女性には小さい人もいる。唇はとくに分厚くはない。男女とも、とくに青年世代では、よく整った明るい顔つきのことが多い。

ダヤック人の性格面での特徴についても個人的な違い、また部族による違いがあるとはいえ、一般的な性格描写を許すだけの充分な共通性がある。

ダヤック人の長所といわれることに、もてなし好き、正直、寛大がある。彼らは他人の考えに対してたいへんに敏感であり、周囲を恐れ、また周囲に対する恥の観念をもつ。彼らの感じ易さはさらに、暴力を嫌うことと他人の苦痛に同情することにも現れている。ただしこれは自分の家族や部族の外に及ばないことがしばしばである。首狩りおよび首長の死後に奴隷を殺すというかつての慣習は、けっして生まれながらの残虐さを証拠だてるものではない。というのも、こうした慣習は彼らの宗教観念と関わりがある、あるいはかつて関わりがあったからである。第9節参照。

たいいていのダヤック人の部族は戦闘的、好戦的、勇敢とはいえない。ただ

サラワクの海ダヤック族がそういう性質だとしてもっともよく言及される人々である。

一般的にダヤック人は道德の面ではボルネオにいるマレー人よりレベルが高い。マレー人の影響は、マレー人の支配下におかれ、その収奪にさらされた諸部族にとって非常に悪いものだった。たとえば、博打や闘鶏に熱心なのはあきらかにマレー人との交渉のせいである。しかしながら、宗教的な祝祭の際の度外れた飲食は、これがまた甚だしい不道德を導くのだが——とくに上バリトの男女の司祭たちおよび上ムラウィ地域の諸部族に目立つ——、これをマレー人の影響に（のみ）帰すことができないのは確かである。これらの点でも、バハウ族、カヤン族、クニャ族ははるかに高い位置にある。

彼らの性格の負の側面として、活力と自信の欠如をあげることができる。これは部分的には、大河の中流部と上流部の諸部族において病気（マラリヤ、梅毒）がもたらす劣悪な生活状況によるものであり、部分的には、マレー人の王たちの側からの何百年にもわたる抑圧と収奪によるものである。さらに好奇心を喪失していて乞食根性である。

ダヤック人の知性の高さはとりわけ外部の諸言語を容易に習得することに現れている。彼らの芸術感覚は非常に高度に発達しており、それは幾人かの個人に限られるというものではない。

#### 4. 衣服、装身具、刺青、身体棄損、武器

プナン族、ブクタン族、ブカット族のような移動部族においても、もはや全裸のものはいない。局部を覆う以外に、ダヤック人における本来の衣服の目的は陽光からの保護である。衣服の装飾としての機能は、ないわけではないが、めったに見られない。たとえばムンダラム・カヤン族では一番素晴らしい衣服を着るのは新年の祝いだけである。

普段着はたいへん質素であり、基本的に部族による違いはない。男性は禪をつける。幅は約90センチ、長さは3.5～7メートルで、股の間を1回わたし、腰を何度か回し、そして半メートルほど前に垂らす。さらに上部が三角



形の四角いロタンの編座を2本の紐で腰にくくりつけていて、湿ったところや汚いところに座る時に使う。戸外ではたいい上衣を着ている。たいい木綿製だが、仕事の時には叩いた樹皮〔樹皮布〕のこともある。そして非常に大きな笠をかぶる。直径が80センチ、高さ20センチのこともあり、ヤシの葉やパンダナスの葉、あるいは竹を割いたものでつくる。この笠はしばしば見事な装飾が施される。上部はビーズか貝殻細工で、他は木綿かフランネルで模様をつける。男性は家の中ではロタンの帯を頭に巻くことが多い。その幅は単なる帯から完全な縁なし帽まで様々である。頭巾をするのはマレー人の真似にすぎないが、ますます広まっている。普通の人よりも、首長たちで普及の度が大きい。

褌と上衣の材料はもともと叩いた樹皮であり、現在も内陸の多くの地方でそうである。しかし、安価な輸入木綿にどんどんかわっている。

装身具では男性はビーズの首鎖をしている。非常に古くて高価なことが多い。上バリトではこの首鎖は瑪瑙でできており、地位のある者は金の塊や真珠を交えている。富裕なオト・ダヌムOt Danum族ではさらに三日月形の大きな薄板2、3枚をさげている。男性のその他の装飾品は足輪、腕輪、耳飾りである。足輪はロタンまたはリアーナ製で、膝の下にする。腕輪はカヤン族とバハウ族ではロタンかりアーナ、あるいは貝か木でできていて、肘の上にする。上バリトのダヤック人では金属製、時には金製で、両腕に15本ずつもすることがある。

おおいに目立つのが耳飾りである。たいいの部族の習慣では、耳朵に穴をあけて重たい耳輪をぶら下げることで耳朵を非常に長く延ばしたり（バハウ族）、穴に棒を入れ、その棒を段々太くしていくことで、あるいは畳んだ葉を入れることで穴を大きくし、ついには外側を金の薄板で覆った鉄木の円盤をその穴に入れるようにする。カヤン族とバハウ族はさらに耳殻の上部に穴をあけ、その中に勇敢さが卓越するボルネオ豹の犬歯または熊の歯を挿している。海ダヤック族では耳朵を大きくすることはめったにない。彼らの特別な耳飾りは、両方の耳殻のまわりに小さな銅の輪の列を作ることである。

ダヤック人女性の家の中での普通の衣服は、樹皮ないし木綿の掛け布であって、臍から手の幅くらい下で体に巻きつける。カヤン女性の場合は例外であるが、その他の多くの部族では膝より下にくることはない。野外で仕事する時は女性もたいてい男性と同様の上衣を着る。戸外では長いサロンを着ることも非常に多い。海ダヤック女性の衣装は例外的である。様々な色の独特の模様をしたあるいは貝殻で装飾した、膝のすこし上までの、木綿製の下衣および同様の上衣、そして、多数の上下に重なったロタンの輪でできた、胸から太股までを覆う一種のコルセットからなる。このロタンの輪は各々、叩いた銅の小さい輪の中にはめ込まれている。

頭にロタンまたはビーズ細工の帯を巻く。戸外の労働の時は、男性よりも大きい日笠をする。女性の主要な装身具は男性のそれと同様だが、その他にビーズ製の帯がある。カヤン女性の耳朶は男性よりさらに長く下がり、肩より 10 センチも下がっていることがある。クニヤ女性では耳輪はふつう軽く、他の多くの部族では女性は木製または金属製の丸い盤を耳の中に入れている。

子供はたいてい 6 歳か 7 歳まで裸で、その後親と同じような衣服をつける。

ダヤック諸部族には刺青の習慣がきわめて一般的である。この習慣をもたない部族もあるが、これらもかつてはこれを有しており、マレー的衣服を受け入れた影響によって、喪失したものと思われる。ただし、刺青をしない部族であるサラワクの陸ダヤック族は、この習慣をまったくもたなかったと主張している。刺青が盛んな部族の中でもカヤン族が最たるものである。他の多くの部族では、この習慣の知識も模様の大部分もカヤン族から取り入れたものである。海ダヤック族でも刺青は非常に一般的であり、さらにプナン族、ブクタン族、ピアジュ族（南西ボルネオ）でも同じである。中央ボルネオでは刺青の性質の違いが部族グループ、部族、男女の性の違いに一致し、ニーウェンハイス博士によれば、3 グループある。第 1 グループはバハウ族、クニヤ族、プナン族で、第 2 グループはブカット族とブクタン族で、第 3 グループはバリト川とムラウィ川の諸部族およびマンダイ川のウル・アユル族である。

第 1 グループは暗青色の線で刺青する。女性の場合、下腕、手、大腿、足

## ダヤック人（上）

に施し、男性は肩、腕、胸である。

第2グループでは男性だけ刺青する。下顎から爪先まで全身が大きな暗青色の区画でおおわれ、模様がもとの肌の色で浮かび上がる。

第3グループの男性はまずふくらはぎに大小の円盤を描き、ついで腕、胴体、首の全部が暗青色の線でできた、連続する模様で覆われる。女性はとくに膝、脛、手に装飾が施される。

第1と第2のグループでは、刺青の技は女性が施し、第3グループでは男性が行う。第1グループでのみ、まず小さい板に模様の浮き彫りをつくり、これに煤を塗って、模様を肌に転写する。第2と第3のグループでは肌に直接描く。

ウル・アユル・ダヤック族は長さ10センチ、幅1センチの銅の板で、一方の端を直角に曲げて鋭く尖らせたものを用いる。棒でこの板を叩くと先端が肌に刺さり、その後ダマルdamar〔樹脂〕の煤または赤い顔料を開口部に入れる。バハウ族の女性とクニャ族の女性は直角に曲がった木の棒を用い、その曲がった先に2、3本の銅針をグッタ・プルチャgutta-percha〔樹脂〕で固定する。この道具を水とダマルの煤を混ぜたものの中に浸し、皮膚に転写した模様にそって叩くことで煤を皮膚の下に入れる。

各部族に刺青に関わる多数の決まりやタブーがある。女性の場合はこの習慣はまだある程度宗教的な観念と関わりがあるが、男性ではほとんど装飾となっておりまた勇敢さを示すものとなっている。

その他の身体棄損では、研歯を第一にあげねばならない。これは非常に広範に見られる。上下の歯を凹ませたり、尖らせたりする。金製や銅製のピンが歯を貫くこともある。

ペニスに穴をあけて金属製のピンを差すのは、とくにカヤン族とクタイの内陸の住民に限られているように思われるが、たとえばセンザンコウschubdier〔動物名〕の鱗でつくった輪を亀頭の後ろにするのはカヤン族でも首長や勇敢な男性の特権である。

ダヤック人の主な攻撃用武器は剣、槍、吹矢である。ダヤック人の剣はカ

ヤン族ではマラットmalat, 海ダヤック族ではパラン・イランparang ilang, そして南東州ではマンダウmandauといい, 刀身が非常に重くて上部では1.5センチの幅があり, そして刀身の一方から他方へと窪んだ穴が1つあいているという特徴がある。きわめて念入りに鍛造され, 非常に鋭利で堅いので, 釘を叩き切ることができる。武器として使うだけでなく, 枝を切り, 板を削り, また薪を割るのにも使う。堅い木ないし鹿の角でできた把手はたいてい見事な彫物が施してある。2枚の薄い板にも見事な彫物がしてあり, これを竹の編み物で合わせて鞘にする。鞘には, 火打石と煙草用品を入れる竹の箱のように旅行中に使うものであったり, 飾りあるいは護符であったりと, 様々なものがぶら下げてある。鞘にはまた柄の長い小さいナイフがついている。このナイフは首狩り行の時にランジャウranjauつまり足を捕える罟を切ったり, 擦って火を起こす乾いた木を切ったりする。

北ボルネオと西ボルネオのいくつかの部族では, カヤン族などともオロ・ガジュ族のものとも異なる剣と鞘をもっている。

槍も剣とほとんど同じくらいダヤック人と切っても切れない関係にある。穂先の長さは約1フィートで, 最大幅は約7センチである。カヤン族の戦槍では刃に多少の窪みがある。柄の長さは約7フィートである。

吹矢は戦具としてはほとんど意味がなく, 狩猟具として用いられることがずっと多い。2メートルほどの長さの固く丸い棒を均等にくり抜いたもので, 一方の端にはさらに槍先が付けてあることが多い。非常に軽い20センチほどの矢を吹いて飛ばす。矢の先には植物からとった毒が塗ってある。矢の末端に, 吹き棒の中の溝にはまるように非常に軽い木片か骨片が付けてある。この矢をしまっておくのに太い竹筒で作った矢筒を用い, 竹か木の丸い蓋と帯にかけるための鉤がついている。

防具としては盾がある。たいていの部族でたいへん幅が広く, 柔らかい1枚板でできている。前面は, 左右の2枚が緩い角度で合わさっているように見える。カヤン族の盾はたいてい装飾がほとんどないが, 堅牢さを増すためにロタンの紐で縁取りしてある。その他の部族ではもっと手を加えてあって,

とくにクニャ族の盾は全面に浮き彫りがしてあり、中央部に様式化された人間の顔が認められる。彼らは倒した敵の毛髪で盾を飾るのをたいへん好む。しかしながら、カプアス川沿いでは現在ではもはやこのような装飾を盾にほどこすことはなく、また自部族の者の毛髪で盾を飾るのも禁じられている。カプアス川沿いのカヤン族は盾の装飾のために、自分の毛髪を売るタマン・ダヤック族から買う。

戦衣は動物の皮でできていて、豹がもっとも良いが、そうでなければ熊か山羊である。襟の開口部にそってビーズ飾りや犀鳥の羽で飾ることがある。そしてロタンで編んだヘルメットの縁や上部に装飾があり、頂点にセイラン argusfazant〔キジ科の鳥〕または犀鳥の羽の飾りがあり、毛髪の房のこともある。こうした鎧の下にカヤン族はカポックを詰めた一種のジャケットを着るが、その袖は身頃とは別になっていて、20センチ幅の布で結ばれている。

## 5. 住居、家財

ダヤック人のほとんどすべての部族の家屋を特徴づけるのは、高い柱の上に建つことと、血縁関係のある多数の家族、時には1部族全部が住むので、非常に長いことである。

もっとも一般的なのはマハカム川のカヤン族の家屋の形態である。彼らはまた、家屋にもっとも配慮する人々である。カヤン族の家は1～5メートルの杭の上に立ち、長さは150～250メートル、奥行きは12～14メートル、高さ（杭の上の）は8メートルである。家は全長にわたって3～4メートルの高さの壁で二分され、そのうち前の部分は共用の廊下であり、家の外とは高さ1メートルの格子細工の柵で隔てられている。後ろの部分は、個々の家族が住むように区切られていて、背後の壁は完全に閉じられている。たいいていの場合に部族の家の中央に首長の家族の居所があり、そこはふつう他の家族の部分よりも前幅が広くとってあり、奥行きもあり、また屋根も幾分高く作られている。

通常の家族の居所ないし区画は約8メートルの前幅、約6メートルの奥行

きがある。両親と、成人した息子以外の子供たちがそこで寝食をともにする。各区画はそれ以上区画されず、ふつう壁面にいくつも凹部をしつらえてあって寝場所は多い。それから炉があり、皿をのせる横棒、薪、日用品があり、壁には竹の水筒、衣服、武器等々がかけてある。幸運にもトゥンパヤンtem-payanつまり聖なる壺の所有者だと、それらは壁に沿って並べてある。みごとな装飾の施してあることの多い木製の扉によって、家族区画は共用廊下とつながっている。共用廊下ではあらゆる日常적인仕事をし、客を迎える。同時に成人した若者と客人の寝る場所でもある。この共用部分にも10~14メートルの間隔をおいて、炉がある。そこはまた櫓、魚網、その他あらゆる日用品の保存場所でもある。女性たちが杵を搗く木製の臼もある。そして最後に、はねた首が、長い列をなしていたり、あるいは炉のひとつの上に並べてある。地面からたくさんの階段が廊下の入口にのびている。たいていは彫り込みのある丸太である。

バハウ・クニャ部族複合に属し、上マハカムに住むロングラットLongglat族には別の建築様式がある。ここでは床と屋根の間の全空間が家族区画で占められ、側壁の扉によって各区画がつながっている。カヤン族の共用廊下のかわりに、地面から数フィートの高さしかない第二の床が柱の間に作られている。つまりここでは通路は住居の床下をとおっている。カヤン族の家との2番目の違いは、ロングラット族では首長が独立家屋に住むことである。その家屋の下は床は前に出ている、前壁は下方に延長されていて、前の屋根はこの床の1メートルほど上まで延びている。かくして下に前部廊下ができ、その部分の横壁も閉じられている。この部分が集会や客を迎えるのに使われる。

ロングラット族の支配下にある小部族マ・トゥワンMa-Tuwanの家屋はロングラット族の首長の家に非常に似ている。ここでは各家族がこうした下部前廊のある家を有する。しかしこの部分には側壁がなく、家屋が連続して建っているため、この前廊は遮られることなく家並の端まで連続する。居住空間の下は床も欠如している。前廊から梯子をとおって居住区画に上がる。

これらの家屋でもカヤン族と同様に、家屋のそばに杵やその他の生活物資

を乾かすための竹製の台がある。

他の諸部族の家屋は、カヤン族と比べて、主に以下のような違いがある。

南東州のオト・ダノム・ダヤック族の家は、前部共用廊下のかわりに、家屋のほぼ中央に、前壁および後壁と並行に共用通路があり、個々の家族区画からここに出てくる。建物の右端に、家屋の奥行き全部をとって客を迎える場所とし、また外来人および未婚の若い男の寝場所とする部分がある。したがって、共用の通路はここから始まる。前壁の前にも通路があり、この通路の中央に扉がある。この扉のむこうに迎客・寝場所があり、そして後壁までずっと左右に家族区画がある。さらに家屋全体が重たい鉄木の柵で囲まれている。ピアジュ・ダヤック族では、この鉄木の柵は同じだが、家屋内部の区分方法は異なる。ここでも、カヤン族と同様、家屋は全長にわたって壁によって二分され、前部分が共用廊下である。しかし後部分がさらに二分され、その前部分が家屋中央の通路として用いられ、後壁に面する部分が各家族のために区画される。ここではふつう、各家屋の前の川の上に筏が1つあって、その上に水浴と排泄のための小屋が建っている。筏は船をつける場所としても洗濯場としても使われる。

西州の多数の部族では、カヤン族やクニャ族におけるような、見事な大きい家屋は見られない。それはマレー人による長いあいだの抑圧のため非常に困窮した生活を送っているからである。カプアス川の諸部族で大きい家屋を見つけたら、それはたいがいカヤン族の建築様式だが、材料の耐久性は非常に劣る。敵の襲撃を多く被ってきた、あるいは最近まで受けてきた諸部族では、家屋が柵で囲われている。

標準からはずれたタイプの家屋に西州のサンガウ・ダヤック族の家屋がある。床は野生の木の杭の上、地上約3メートルにある。屋根は、長い方の両端がこの床のすぐ側まで降りている。家屋の狭い方にのみ側壁があって（ここでは前壁と後壁）、葉ないし樹皮でできている。前壁の中央に扉があり、粗雑な丸太の梯子で上がる。扉を入ると1~2メートル幅の中央通路があり、その右側に家族区画がある。左側は客人と未婚者のための炉場であり、その前

に（つまりさらに左の方に）また共用の通路が通っていて、この通路は屋根によって閉じられている。この通路から、屋根に取り付けられた庇戸を通して、床が屋根の外にはみだしてできている空間に出る。この空間で粉を乾燥させたり搗いたりし、また大きな祭りがここで行われる。

バハウ・クニヤ諸部族はできるだけ木、それも可能なら鉄木やその他の堅い樹種を家屋の材料に用いる。それが手に入らない時は、竹や葉も使う。他の多くの部族では家を建てるのにあまり労力をかけず、竹や葉が材料としてよく使われ、家屋内部の隔壁にも樹皮などのあまり耐久性のない材料が使われる。屋根を葺くのに木製の屋根葺き板（マレー語でシラップsirapという）が好まれる。バハウ族では首長の屋根には鉄木の板、その他の家ではトゥンカワンtengkawangの板が使われる。

たいていのダヤックの部族において、家屋を一時的にしか利用しないという特徴がある。居住地のまわりに建設可能な土地がなくなったら、他の定住地をさがして新しい家屋を建てる。西州のいくつかの地方では一か所に数年しか住まないため、この慣習が、家屋の建設にあたって払わなければならない配慮に悪影響をおよぼす。しかし、大きくて固く連結され、そして見事な彫刻で飾られた家々が部族仲間の多大の労働を必要とするバハウ族の場合でさえ、この慣習が存在する。他の原因も住居の移転をもたらしめている。たとえば、人々から怒れる霊の影響とみなされる長期間続く病気、また敵の襲撃である。家屋が敵によって焼かれなかったら、こうした引越の際、もとの家屋の耐久性のある材料をできるだけもっていく。

家屋の建築には、諸霊の好意を得るためと住民からあらゆる汚れを取り去るための宗教儀礼が特別重視される。とくに重い杭を建てる時に、たくさんの供え物がなされる。ヨーロッパ行政の影響が入る以前、とくにサラワクのいくつかの部族では、角の重い柱を建てる穴の1つに若い女性奴隷が投げ込まれ、杭でべちゃんこにされて死んでしまうという慣習があった。こうした地の霊への供犠は現在ではブタまたはニワトリに変化している。材料を集めたり加工したりする時にも様々なタブーがある。こうした際には、建設を開



始する時と同様に、様々な前兆とくに縁起鳥の飛んだり鳴いたりすることに十分な配慮が払われる。

家屋はほとんどの場合、川のすぐそばに、長い方を川に並行させて立つ。この点でもサンガウ・ダヤック族の家は例外である。多くの部族で村はこうした長い家屋1軒からなる。そうでなければ、居住地はこうした家屋いくつかで形成され、たくさんあることはめったにない。バリト川上流の諸部族では、こうした部族の家屋の他に、村の中にいわゆるバレイbaleiがある。それは船着き場となる筏のすぐそばにある小さい建物である。このバレイが、外部の者を泊め、評議をし、裁判をし、会合を開くところである。バハウ族等々では集会は族長の家の前廊で行われる。

南東州の上流部ではいまだに村全体が鉄木の柵で囲まれていることが多い。

大きな部族の家に全員が一年を通して住むわけではない。農繁期に出作り小屋にいるのが非常に一般的だからである。長い間にわたって敵の攻撃をほとんど受けなかった部族では、別々の家屋に住むのを好むようにさえなっている。

家屋建築の顕著な類型を有する諸部族は、他の地域に移動してもそれを保持しているものであることを指摘しておきたい。

本稿の冒頭に述べたように、ボルネオの内陸にはいまだに固定した居住地をもたないいくつかの部族がいる。これらプナン族、ブカット族等々は、夜や天気の良い時だけ枝や葉で屋根がけをする。

## 6. 部族の構成・行政・裁判

ダヤック人の部族の組織について考察する際には、部族stamの語がこの民族集団に関しては様々な意味で用いられていることに留意する必要がある。この語をバハウ族やカヤン族等々の複合体全体には適用しないで、その下位部分にのみ適用するのがおそらくもっとも混乱が少ないであろう。このような部族は1つの大きな家屋に住むことがあり、1つの居住地の複数の家屋に住むこともある。またいくつかの居住地に分かれていることもある。それゆえ、1

つの家屋に1つの下位部族、部族の1部分、あるいは一族だけが住むこともありうる。たとえばアボ・カヤンのクニャ族では、多くの部族（ウマ・トウ Uma-Tow, ウマ・ジャラン Uma Jalan 等々）の場合に、各々 200 ないし 300 の家族を数えるため、単一の家屋に集住していないし、1つの居住地に集住していないこともある。イギリス領ボルネオのカヤン族ではほとんどの村が複数の長い家屋からなる。

さて、たいていの場合に、自身の権力、自身の司法、自身の財産をともなう法共同体の性質は、単一の大きい家屋に集住しようとして、1居住地の複数の家屋に分かれていようと、部族にのみ付与されうる。成員は、奴隷<sup>2)</sup>は除いて、相互に血縁がある。したがって系譜的法共同体である。ある部族が1居住地に複数の家屋に分かれて住む場合（イギリス領ボルネオのカヤン族）、各家屋にやはり、重要度の低い、純粋に内部的な問題のための自身の首長がいる。諸部族が他のある1部族の支配下にあるということも起こりうる。たとえばアボ・カヤンではウマ・トウの部族に指導的地位が帰している。上マハカムではロングラット族が他の小さい諸部族と一緒に住んでいて、小部族には各々首長がいるが、彼らはロングラットの首長に服従しなければならない。しかし、いくつかの地域ではすでに、諸部族の成員が居住する、領域的村落が法共同体として出現している。

ムンダラム川のカヤン族では、部族は1人の首長、自由民の諸家族、そして奴隷からなる。首長の地位は世襲だが、息子たちのこの職への適性が考慮されるので、必ずしも長子相続ではない。身体の欠損も相続の妨げとなることがある。息子たちが優先されるとはいえ、女性も首長の職につくことができ、その場合、男性首長と同じ尊敬を享受する。

首長は外部に対して部族を代表し、部族員に裁判を行い、男性または女性の司祭たちに農業にともなう宗教的儀礼を執行させる。首長は部族の全般的な財産を支配し、部族に属する奴隷を使用する。これに対して首長は、外来の客人の接待ともてなしをしなければならない、そして部族内に生じた対立をおさめなければならない。

首長の司法権は、一般的に考えられるとおり、もっぱら首長が慣習adatの維持者であるという部族員の信頼に基づいている。慣習法が求めることがらについて相談するために、首長は自分のマントリmantri〔大臣、高官〕たちの考えを聞く。マントリたちはその部族の自由民のなかでもっとも能力があり尊敬される者たちである。裁判の審理の前に、当事者とその家屋の全住民が、奴隷や女性も含めて、集会を招集され、誰もが自由に発言する権利がある。

慣習法によれば、ほとんどどんな違反でも、被害者に対する賠償という性質をもつ罰金が課されるだけである。罰の執行はマントリたちに委ねられ、マントリたちは強制手段というものをもたないが、カヤン族が世論を重視すること、また慣習のきまりに背くことに対する諸霊からの罰としての病気への恐れがものをいう。カヤン族の自由民が首長に対して負う義務は、首長の住居の建設やその他の重労働の手助けをすること、そして稲作において1作期につき1日首長のために働くことだけである。

部族員の個人的なことがらへの首長の関与は、とりわけ若者が他の村の娘と結婚したい時に首長が同意を与えねばならないという要請にもとづくものである。また孤児に他の有資格者がいない場合、その後見人となり、成人するまでその財産を管理する。

部族の首長は、部族の財産である奴隷を使うことができる。すなわちこの生きている財産は部族の代表としての族長によって管理されるのである。奴隷は族長の家族員ないし族長によって任命された者の監督下に、森の中、耕地、家の中であらゆる仕事をしなければならない。特別な才能のある奴隷は族長によって何ヵ月もの商業旅行に派遣され、利益の一部分が自分のものとなるので、奴隷も富裕になることがありうる。カヤン族における奴隷の扱いはたいへん寛大であるだけでなく、たいへん良好ということが出来る。低い地位に置かれることはめったになく、司祭の身分に取り立てられたり、戦争の指揮者にさえなることがある。上マハカムのカヤン族における身分の区分は一般に、ムンダラム川の同族と同じである。ただロングラット族のバハウ族においては、その村の中に様々な小部族が一緒に住み、その首長たちは口

ングラットの族長に対して従順でなければならない。また彼らの場合も、たいていの奴隷は結婚によって部族内に受け入れられる。実際、まさしくマハカムの諸部族において3つの身分の区別が上カプアスよりもはるかに大きい。首長ははるかに大きい敬意を受け、慣習のきまりはずっと厳格に維持される。

クニャ族の場合に、サラワクのカヤン族の場合と同じであるが、たとえば10軒の大家屋からなるロン・プティLong-putihのような大きい村では各家屋に首長がいるが、さらに村全体の上級首長がいる。

ボルネオのその他のダヤック諸部族では上の場合ほどはっきり内部の区分がなされない。オト・ダノム族やオロ・ガジュ族の首長たちはふつうあまり大きい影響力をもたない。西州の多数の部族では、たとえばマンダイ川の諸部族のように、首長は現在もあるいはごく最近まで住民によって選ばれ、その後にヨーロッパ人行政官がその職を確定することもあった。ウンバル・ダヤック族などのその他の部族では首長は世襲である。これらのダヤック人の場合、明瞭な身分差はほとんど認められない。ムラウィ川のオト・ダノム族のようにいくつかの部族は奴隷を保持するので、ここでも首長とその家族、自由民、奴隷という区別が知られているということになる。ムラウィ流域のダヤック人ではさらに、いわゆるマルダヘカmardahekaつまり自由な諸部族とスラserah諸部族の区別がある。スラ諸部族は何十年にもわたって支配者を称するマレー人に服従しており、そのため元来の部族内の区分があまり残っていない。

如上のことから、政庁の裁判が導入されておらず、また司法権がマレー人の王に属さないかぎり、司法権が部族の首長の手中にあるのは明らかである。ほとんどすべての違反や犯罪に対してもっぱら罰金で罰するという、バハウ諸部族で一般的な方法は、西州の多数の部族はじめ他所でも見られる。こうしたきまりが行政から承認されている、あるいは承認されていた場合、これは違反に対する罰と犯罪に対する罰をはっきり区別する方向への過渡的状況と見ることができる。

南東州のダヤック人の元来の司法では、神の意志が非常に重要な位置を占

めていた。西州の多数の部族でも同様である。これに対してバハウ族ではこれが用いられることは非常にまれである。項目「神判GODSGERICHTEN」参照。

誓約はひろく行われる。ガジュ族では、被告人が米を撒きながら、嘘をついたなら自分と子孫に呪いあるべしとしつつ、宇宙とその中に住まう霊たちに自らの無実を証言するようよびかけがなされる。その後で、偽りの誓いをしたのであれば自分の運命がこうむるであろうことを象徴的に示すものとして、石を水に投げ、ロタンを切断する。バハウ族では誓約は虎の歯の上で、あるいは犬をゆっくり殺しながらその血を誓いをたてる者に塗って、行われる。偽証の場合は、後に犬の中にやどる霊によって追及されて死に至ると信じられている。項目「誓約EED」参照。

## 7. 土地権、農業、その他の生業

住居の記述ですでに述べたように、定住する諸部族でさえ8年ないし10年しか同じ家屋に住まないことがあり、もっと短期のことも多い。こうして居住地を変えることは、ひとつには彼らの農業のやり方に起因する。中央ボルネオの進入困難で無住の原生林の中にはまだ誰も権利を主張しない広大な地域が存在するとはいえ、どの部族も放浪を続けながら土地を選択するのが完全に自由というわけではない。各部族が処分権beschikkingsrechtをもつ特定の地域を有しており、ある部族の地域と他部族のそれが直接に接することも多い。

部族の処分権の行使は、大筋において、群島の他の部分で見られるのと同種のものである。元来の制度がもっともよく保持されている諸部族の間の違いはきわめて小さい。ここで述べておくべきは、南東州のドゥスン地域県ブントウック分県において、系譜共同体の諸権利が、行政の関与の結果、行政単位である郡districtに移行してしまったことである。

部族の成員はしたがって、第一に、処分権のある区域内における開墾の権利を有する。バハウ族では奴隷さえこの権利を有する。彼らは首長と協議の

上、誰でも必要と考える土地を選ぶ。部族の成員はさらに森林産物を採集できる。しかし首長に許可を求めることが必要な地域もある。バハウ族では首長は自分の奴隷に森林産物を捜させ、その場合奴隷に採集物の10分の1を分与しなければならない。森の中の狩猟と河川での漁労も部族員には自由である。

他所でよくみられる処分権の発現は、部外者が当該首長に許可を求め、許諾料の支払いをして初めて開墾について同じ権利を認められることである。ダヤックの諸部族ではどこでもこれを厳格に守っているわけではない。単に知らせること、あるいは決して拒否されることのない許可を求めることが必要とされるだけの地域もある。形だけの許諾料として小さい贈り物だけのこともある。近時とくにジュルトウン(jelutung〔樹脂〕などボルネオのいくつかの森林産物が大きな意味をもつようになったことから、どこでも権利を有する共同体から一定の割合、たいてい10分の1が求められるのが普通になっている。こうした徴収は全面的に普遍的な慣習に基づいており、その慣習はたとえばクタイではスルタン政府がずっと承認してきているので、政庁による広大な地域のジュルトウン採集のコンセッション発給やマレー人森林産物採集グループの勝手な行動は、ダヤック人には自分たちの権利の甚だしい侵害と写るのである。共同体がすでに耕作された土地に対して関与し続けることは、ダヤックの諸部族において、とくに譲渡が禁止されていることから、また森の状態に返った耕地が共同体の処分権のもとにあるという慣習から明らかである。

処分権をもつ共同体の各成員に開墾の権利が認められることから、開墾者にとっての原住民の所有権が発展してきた。かくしてバハウ族では各家族が自身の稲作耕地を所有し、そして成人した息子や娘もまた自分の稲作地を得るのである。一度耕作された土地は、何年も放置していたとしても、最初の開墾者の所有でありつづける。土地を売ることができないという制限は彼らの場合にも存在する。所有者は土地を交換することはでき、また同部族の者には売ることができる。

定着的なすべてのダヤック諸部族において、農業とくに稲作が主な生業である。ダヤック人の生活の大部分は稲作に関わりがあり、稲作は彼らの宗教的観念ときわめて密接に結びついており、宗教的な行為や多数の禁止規定もこれと分かちがたく結びついている。各時期の初めに必要な儀礼はすべて首長が男性司祭または女性司祭に行わせるのであるから、首長は稲作においても重要人物である。

ボルネオにおいて稲作は、重要性にもかかわらず、まだ非常に低い段階にあり、略奪耕作つまりいわゆる「火耕 brandcultuur」に他ならない。犁は知られていないが、北ボルネオのドゥスン族だけはその使用を中国人から学んだ。サワー-sawah〔水田〕耕作は、サラワクのバラム川のカラビットKalabit族以外にも、海岸近くに住む諸部族で見られる。

一地片の森林を陸田にする普通の方法は、高木を倒すことで、それはふつう地面からかなり高いところで刈る。根が巨大だからである。斜面の場合は、先端を上にしたV字形に伐開する。まず下方に横たわる幹を刈り、その後もっとも上にある樹で下方のすべてを押し倒す。

刈った木は、火をつける前に数日間乾燥させなければならない。開墾に乾季が優先されるのはこのためである。灰が冷めたらただちに、植え始めることができる。一般に種子を撒くことはなく、男性が木の棒で地面に穴をあけ、女性がそこに種子を入れる。たいていは家族毎に稲作地をもつが、困難な労働に際しては相互扶助が行われる。

耕作時季を決定するために、ボルネオの多くの地域で、たとえば海ダヤック族で、ドゥスン地域県で、西ボルネオで、昂が参考にされる。クニャ族では直立させた棒の影を測る。他所では水を入れ、外から目印をつけた竹を立てる。この竹は何回も傾けられ、特定の星を指して水がこぼれる。水が目印のところまで減るまでこれを繰り返す。

稲作の様々な時期に、バハウ諸部族やクニャ諸部族では、大きな祭りをを行う。それはすべて宗教的性質をもつ。すべての儀礼は、稲作地の儀礼用に定められた小区画で執行される。たいていのインドネシア人と同様、ダヤック

人においても、米の食糧としての意義の大きいことから、稲に魂が宿っているだけでなく、その魂ないし魂の宿主は人間の価値とほぼ同価値であるという考えが生じた。稲魂が去ってしまうというのは時々ありうるのだが、そうした時には稲は食糧としての価値を失うとされ、すなわち不作になる。とくにマハカム・カヤン族において稲魂をよび戻すための仮面舞踊が行われるのはそれゆえである。グロテスクな仮面をつけた者は、人間より強力と考えられる諸霊を表現している。

ダヤック人の耕作や農業のレベルの低さゆえに、ふつう土地は1年だけ使い、その後2年間休閑する。3年目にその土地に再び利用するのに充分植物が生えている。こういうやり方で同一の土地を12～15年間に3～4回利用すると、収量が非常に低下するので、新しい肥えた土地の利用を決意しなければならない。すぐ近くに適当な場所がないと、全村が別の居住地を求めることになる。

すでに述べたように、農繁期には各家族が稲作地の小屋に住む。作物を鳥から守るために耕地上に小屋を立て、その中にロタンのロープを集中させる。音が鳴るようにした竹をこのロタンで動かすことができる。除草は多くの場合女性が行う。実際、耕作の全体で、また耕作と結びついた宗教的儀礼で主な役割を果たすのは女性である。

収穫を取り込んだ後に大きな祭りを祝う。ムンダラム川のカヤン族では、その時1年でもっとも主要な祭りである新年の祭りをを行い、1年間に生まれた子供たちに最終的な名前がつけられ、新しい収穫をたらふく享受する。この祭りもたくさんの宗教儀礼をとまなうので、ダユンdayungたちつまりカヤン族の女性司祭たちが主要な役割をになう。

ダヤック人におけるその他の農作物ではメイズ、サトウキビ、ジャガイモ、タバコが重要であり、またピサンやパパヤの樹も稲作地に植える。ドリアン、ジャンプ、ドゥクなどその他の果樹、またシリーの樹は共同家屋のそばの小さい囲いの中に植える。

ダヤック人にとって、森林産物は非常に重要である。米が不作の時の食糧



として——こういう場合には野生のサゴがたくさん利用される——，また商品としても重要である。商品として重要なのは第一にジュルトウンであり，さらに竜腦，ロタン，そして野生の蜂の産物である。

漁労も，ボルネオの河川は魚がきわめて豊かなので，ダヤック人の重要な生業である。釣竿，網，銚，筌あるいはトゥバtubaを用いる。トゥバは各種の根や樹皮の搾り汁で作った麻醉剤のことである。根や樹皮を叩いて水に入れると魚が上がってきて，これを各種の道具でつかまえることができる。

移動部族で主要な生業の一つである狩猟は，定着部族では副次的な位置にある。とくに野豚，野生の猫，ウズラのような鳥を捕獲する。多くの部族で，鹿などいくつもの動物が，宗教的観念のために，その肉が禁じられている。狩猟にはひろく犬を使う。

必要もそれを満たす手段も共同体の全員にとってだいたい同じであるという，ダヤック人が置かれている社会的立場のゆえに，共同体成員相互間に商業はない。これに対して，部族間あるいは外来商人との商業は非常に重要である。自身の生産物と森林産物を売り，塩，プリントの木綿布，タバコ，ビーズ，鉄器等々を買う。一部は今なお物々交換だが，交換手段としての貨幣もやはり使われている。

ダヤック人の交易行は非常に遠くに，したがって何ヵ月にもおよぶことがある。たとえば上マハカムからサラワクにいたる。たとえばアブ・カヤンのクニャ族におけるように，首狩り行が原因である部族に対して通行が閉じられる時，交易行は多数の人間が同時に行う以外にないということになる。奴隷に交易行をさせることも多い。

ダヤック人の交易行の主要な目的はビーズの買い入れである。つまり，古いビーズを所有することは，内陸の諸部族においてたいへん値打ちのあることなのである。くわえてビーズはあらゆる衣服の装飾や宗教儀礼において用いられる。さらには部族内で交換手段として，つまり貨幣に代わるものとして使われることも多い。

パジュ・ウンパットPaju-Empat（南東州ドゥスン地域県プントウック分県）

のオロン・マアニャン族の造船も取り上げておくべきであろう。5～6 人が時には何日もかけて森に入り、一時的滞在地をつくり、そこで 80～100 隻の船を作る。これらを近くの川に運び、そこからバリト川に出し、そして大きな筏に組む。マラバハンMarabahan、ヌガラNegara、バンジャルマシンBanjar-masinその他の場所で 1 隻平均 10 ギルダーになる。

製造業はダヤック人一般に、ほぼ家内工業に限定され、ほぼ家族単位の自給用に限定されているので、職業というべきものではない。この原則の例外は鍛冶である。どの村にも鍛冶屋がいて、必要な鉄器を作っている。すべての部族が鍛冶を知っていて、その材料は現在では主に輸入した鉄を使っている。上マハカムのロングラット族のように自ら製鉄を行うこともある。とくに剣の鍛冶は職業ということができる。

ダヤック人の家内工業は主に、樹皮からであれ、機織であれ、衣服を作ることであり、またその装飾を作ることである。この装飾はとくにビーズ細工である。またその他に、笠、莫蔭、箆等々を、竹、ロタン、パンダナスその他の葉で編むこと、土器を焼くこと、剣の木製の鞘や角製の握りの製造、そして竹筒切りもある。

こうした製造業のすべての部門で高度な芸術的感覚が表現される部族が多い。日常使用されるあらゆる品物にも芸術が表現されているので、家内工業は工芸とよぶのがふさわしい。とくに木や骨の彫刻、竹筒の装飾、ビーズ製品にダヤック人芸術家の才能がもっとも高度に現れている。もっともよく用いられる装飾モチーフは人物像と動物像(犬、蛇、犀鳥)である。バハウ族とクニャ族では、保存力を示すものとして生殖器モチーフが多く見られる。

## 注

- 1) (原注) 本稿における外来語中の e は、Borneo等のよく知られた語の場合を除いて、すべて無声音のeを示す。
- 2) (原注) この項目で奴隷という時、ボルネオでは我々の権力が樹立されて間がないか、まだ強固でない地域にのみ奴隷制が見られることに留意すべきである。項目「奴隷制SLAVERNIJ」参照。